

東北大学附属図書館

外部評価委員会報告書

2024(令和6)年3月



▲大隅附属図書館長による挨拶



▲「若手職員との意見交換」での外部評価委員



▲若手職員

はじめに

東北大学附属図書館は、このたび外部評価を実施いたしました。2002年度(平成14年度)、2007年度(平成19年度)、2016年度(平成28年度)につづき、今回が4度目となります。それに先立ち、対象期間は2017(平成29)年から2022(令和4)年度とする自己点検・評価を2023年(令和5年)に実施し、報告書も公開いたしました。

今回の外部評価の対象期間で特筆すべき事項として、まず2020年に急拡大した新型コロナウイルス感染症の影響が挙げられます。緊急閉館、ラーニングコモンズ・グループ学習室の閉鎖、オンライン授業への対応など様々な対応を強いられました。他方で、講義やコミュニケーションのオンライン化が大きく進み、オンランツールの利用が進んだことが学習行動の大きな変容につながりました。2021年2月、2022年3月には震度5を超える地震があり、資料落下、漏水、照明ほかの落下、亀裂等の被害がありました。また急速な円安に伴う電子ジャーナル高騰や光熱費急騰への対応にも苦慮いたしました。

明るいニュースとしては、2017年4月農学分館移転・開館につづき、2021年5月医学分館リニューアル、2023年11月北青葉山分館リニューアルを実現することができました。また2018年3月には「東北大学オープンアクセス方針」を策定し、2022年4月にWiley社、2023年1月にSpringer社との転換契約パイロットプロジェクトをスタートするなど、学術情報流通のオープン化に向けた試みもスタートしました。

今回の外部評価では、5名の有識者の方々に委員をお願いし、自己点検・評価報告書および各キャンパス図書館の实地視察、職員とのディスカッションをもとに、外部評価委員会で議論および評価を行っていただきました。本報告書に収録したのは、委員会開催後に各委員から提出いただいた評価書および委員長からの総評であり、各委員から貴重な問題提起やご提言を頂戴することができたと考えております。私たちは本報告書の内容を真摯に受け止め、今後の活動の改革・改善に向けて役立ててまいりたいと思います。

最後に、ご多忙中にもかかわらず、快くお引き受けいただいた外部評価委員の皆様、あらためて厚く感謝いたします。

令和6年3月
東北大学附属図書館長
大 隅 典 子

目 次

はじめに	1
目次	2
1. 外部評価委員会	
1.1 名簿	3
1.2 日程	4
1.3 資料	4
2. 評価・提言	
2.1 総評	5
2.2 外部評価書	7

1. 外部評価委員会

1.1 名簿

氏 名		所 属 等
(委員長)	坂 井 修 一	東京大学附属図書館長
	酒 見 佳 世	慶應義塾大学メディアセンター本部 リソースマネジメント担当課長
	佐 藤 翔	同志社大学免許資格課程センター 准教授
	鈴 木 秀 樹	北海道大学附属図書館 事務部長
	松 本 美 奈	東京財団政策研究所 研究主幹

※氏名の五十音順

1.2 日程

開催日：令和5年11月6日(月)

場 所：東北大学附属図書館(本館)大会議室

日 程：10:00 開会

10:10 自己点検・評価報告書に基づく説明(30分)

10:40 視察①本館(40分)

11:20 移動

11:35 視察②医学分館(25分)

12:00 移動

12:15 昼食(60分)

13:15 視察③農学分館(25分)

13:40 移動

13:50 視察④北青葉山分館(25分)

14:15 移動

14:25 視察⑤工学分館(25分)

14:50 移動

15:00 休憩(15分)

15:15 若手職員との意見交換(30分)

15:45 質疑応答(30分)

16:15 講評準備(30分)

16:45 講評(20分)

17:05 閉会・事務連絡等(10分)

1.3 資料

1. 東北大学附属図書館 自己点検・評価報告書(2023年7月)
2. 東北大学附属図書館 自己点検・評価報告書 正誤表
3. 外部評価委員名簿
4. 東北大学附属図書館の現状と課題(スライド)
5. 東北大学附属図書館概要2023
6. 図書館報木這子(Vol.47-2「附属図書館創立111周年記念特別号」、Vol.48-1「新入生歓迎号」)
7. 図書館のみらい基金リーフレット
8. 利用案内(本館)
9. 東北大学附属図書館調査研究室年報 第10号(2023年4月)
10. 外部評価シート(様式)

2. 評価・提言

2.1 総評

東北大学附属図書館は、今年で創立112年を迎えた本邦でも屈指の大学図書館である。そのミッション声明には、「東北大学附属図書館は、本学における学術情報流通の中核として情報基盤の重要な部分を担い、研究者・学生及び職員が必要とする情報資源の収集、創成、組織化、並びに提供を通じて本学における教育・研究活動を支援する。さらに、国内外並びに地域社会における学術研究の進展及び文化の振興に寄与する。」と簡潔に記されている。また、図書館を含む大学全体の使命については、「東北大学は、建学以来の伝統である『研究第一』と『門戸開放』の理念を掲げ、世界最高水準の研究・教育を創造します。また、研究の成果を社会が直面する諸問題の解決に役立て、指導的人材を育成することによって、平和で公正な人類社会の実現に貢献します。」と明記されてもいる。これらは、単なる理念やスローガンではなく、実践的な指標として機能させることが何より大切と思われる。

21世紀になってからの情報化(電子化、ネットワーク化)の爆発的な進展、東日本大震災の被害、そしてコロナ禍は、図書館のありかたに抜本的な変革を強いるものであった。また、国際情勢の不安定化と円安は、光熱費や外国資料の購入費の高騰など、財務面で思わぬ労苦を図書館にもたらしている。苦境の中で、従来積み上げてきたものの上に新しい役割を果たすことが要請されているわけである。

そうした一方で、大学の知は、必ずしも時代によって変わるものばかりではない。東北地方にもゆかりの深い芭蕉の言葉を借りれば、「不易流行」こそが学問・文化の本質であるという見方は、今も大切なものだろう。

すなわち、激動する世界に真摯かつ合理的に向き合い、本来の使命を新しい形で果たしていくことが、本図書館にとって最も重要な事柄と考えられる。

評価対象となる期間(2017年度から2022年度まで)で、本図書館が対外的に最も強いインパクトを与えたのは、海外大手出版社との転換契約を締結したことであり、これは東北大学の学術的価値を高めるのに貢献しただけでなく、本邦におけるオープンアクセス(OA)の門戸を開くものとして、なにより高く評価されるべきである。転換契約とともに、リポジトリの充実もはかられており、これらはOAの両輪として全国大学図書館の規範となるものがある。実際、東北大学を筆頭として全国規模の動きができてきており、全国の研究者はもとより、行政や産業育成の立場からも多くの期待が寄せられている。

研究支援については、さらに、蔵書目録データベース、デジタルアーカイブなど、しっかりと充実してきている。

学習用学術基盤については、選書のしかたや電子ブックの整備法に先進性が見られる一方で、予算削減による悪影響は拭いがたい。国の新しい制度を活用する、漱石文庫によるクラウドファンディングを行うなどに続き、打てる手を次々に打っていくことが必要となっている。

図書館施設は、本館・分館ともに充実しており、ラーニングコモンズも各館でしっかり運営されていた。その中でも特に印象的だったのは、青葉山コモンズであった。ここは、従来の図書館のアカデミックさと、新しい時代のオープンさの両立をはかったものになっている。さまざまな人々が垣根無く交わることで合理的かつ独創的な知を次々に生み出すことは、これからの学問の軸となる方法論であり、青葉山コモンズはこれを果たすための一步を示した場として、今以上に注目されてよい。また、書庫の狭隘化をここで全学的に解決できたのは、東北大学の運営体制の優れた点として評価されよう。

学生支援は、人的資源をどこまで割けるかにかかるところが大きく、人員削減の進む今の時代の図書館として健闘している印象を受けた。リテラシー教育など、オンライン化で省力化できるものもあるが、留学生のケアを含め、相手が生身の人間であることを忘れないことも大切である。コロナ禍もあって、人が人と接する時間が短くなっているのは、図書館に共通する現象である。この問題は、国立大学図書館協会などでも共有しながら解決に向けて努力していただければと思う。

貴重資料の電子化・保存・展示については、「史記」、「類聚国史」（「狩野文庫」）をはじめ、別置された上でよく整えられている。地域貢献や広報も独自性のある効果的なやりかたを試みて成功しているようだ。地域社会への貢献についても、震災記録など顕著な活動が見られた。

運営について、若手職員の育成はうまくいっている印象であった。各部局の図書館（室）はどうか。大学全体の図書館システムとして、有機的で適応力の高い運営をめざしていただきたい。

国立大学附属図書館の中でも代表格の図書館として、これからは、(1) サイバーフィジカルなシステム構築と運用、(2) オープンアクセス、オープンサイエンスの舞台としての機能、(3) 国際化を含む他機関との連携強化などが必須となる。これらのためには、人材育成と財源確保が最も大きな課題となるだろう。すでに先進的な成果をあげている本図書館ではあるが、さらなる発展のため、国際卓越など新しい予算措置が追い風になることを期待するとともに、文部科学省など諸官庁や大学執行部の支援、国立大学図書館協会での連携などを受け、さらなる高みをめざしていただきたいと、心から願う次第である。

外部評価委員会委員長
東京大学副学長・附属図書館長
坂 井 修 一

2.2 外部評価書

外部評価書について：

- ・各委員が、「自己点検・評価報告書」の事項に沿って評価し、外部評価書を作成。
- ・評価：特に優れているものは「S」、優れているものは「A」、標準的なものは「B」、不十分または改善の必要があるものは「C」。評価することが難しい項目は空欄。
- ・コメント：評価に関するコメントを自由記述。

2.2.1 坂井 修一 委員

自己点検・評価報告書の事項	評価	コメント
1. 学術情報整備の促進		
1.1 学習用学術情報資源(学生用図書等)の整備		
(1)学生用図書の財源確保	A	学生一人当たりの資料費、よく健闘している。減少傾向に歯止めをかけるためには、従来とは違う仕組みが必要。全学的な視野に立った蔵書構築のシステム化については、分野横断的な識者のとりまとめが必要ではないか。学生選書企画を進め、さらにオンライン選書・オンライン投票など新しい仕組みを導入するなど、積極性・先進性が認められる。電子ブックについては、大手出版社の機関ライセンス契約の導入を検討する時期に来ており、学術雑誌の転換契約の次の課題として意識するべきである。
(2)学生用図書の選書	B	
(3)学生選書の取組み	A	
(4)電子ブックの充実	B	
1.2 基盤的学術情報(電子ジャーナル等)と研究環境の整備		
(1)電子ジャーナルの財源確保	S	本邦で最初に大手出版社と転換契約を締結した成果は高く評価される。財源確保も、本部・部局をとともに説得したことは、従来の国立大学の仕組みではなかなかできないことで、他の多くの大学に良い影響を与えた。これらの点、特筆に値する。大学全体の経費抑制と受益者負担を両立する仕組みは未だ試
(2)電子ジャーナルの選定	A	
(3)蔵書目録データベースの整備	A	
(4)教育・研究成果等の発信	A	
(5)貴重資料の電子化	S	

行錯誤の過程にある。引き続き、最適化を進めてほしい。また、大手出版社との契約を優先せざるをえない現状から、大手からはずれた専門分野のジャーナル購入が圧縮される傾向がある。これに対するより具体的・実効的な対策を立てる必要がある。蔵書目録データベースは、漢籍の整理などむずかしいものにも(実現できていなくても)目が行き届いている印象を受けた。予算的に困難な面があるだろうが、さらに前向きに進めてほしい。リポジトリの充実、特に紀要論文のアップロード、アクセス数の増加はこれからのオープンアクセスを加速するものとして評価される。プレプリントやエンバーゴのありかたなど、さらに検討するのが望ましい。デジタルアーカイブについては、公開点数の増加・クラウドファンディングの活用などにおいて大きな進歩が見られた。標準化・貴重資料のさらなるデジタル化を期待するが、これらについてはソフトウェア等を大学研究機関で共有すべきかもしれない。

2. 学習環境の整備

2.1 図書館施設・設備

(1)施設・設備の整備	S	農学分館の設立は、従来の図書館の枠組みを超えるコンセプトが素晴らしい。各館のリニューアルも順調に見え、遅れている場所についても課題検討がしっかりされて前向きに進められているようである。「書庫の狭隘化」はきちんと解決されていた。ラーニングコモンズは各館で合格水準にあるが、PBLを行う
(2)書庫の狭隘化への対応	S	
(3)ラーニングコモンズの整備と活用	A	

		など、さらに多様な活用法を考えてもよいように思われる。
--	--	-----------------------------

2.2 図書館サービス機能

(1)開館時間延長のための経費確保	A	経費については、「確保」はむずかしいの だろうが、運営において苦しい中をよく頑 張っている。24時間運用は拙速にならな いよう、試行期間をしっかりと置くのが良い だろう(現状が悪いとは言えない)。学生 の利用については、講義・実験・本・雑誌 のオンライン化を考慮して評価する必要 がある。BYOD下での情報環境整備は (電波の状況まで確認したわけではない が)合格点と考える。学生のケアは全体に よくやっている印象を受けたが、PBLを 提供するなどは、新に試みて良い。初年 次学生については、情報検索の教育につ いて貢献が大きい。なお、「学問論」につ いての報告書27ページの記述は誤解を 与えるものであり、(全学の中で果たすべ き役割を果たした、などと)修正したほう が良い。全体に、講習会開催など、図書 館が開催するものとしてはアクティブで 出色のものがある。
(2)開館時間とサービス	A	
(3)学生の利用状況	A	
(4)情報利用環境の整備	A	
(5)初年次学生向け科目への参画	S	
(6)情報リテラシー教育	S	

2.3 国際化対応

(1)留学生向けサービス	A	国際化については当日、時間の関係など で説明不足であったと思う。報告書を読 む限り、「留学生コンシェルジュ」は機能し ているし、図書も充実している印象であ る。全学的な課題と思うが、これからは、 「待ち」の姿勢から「迎え」の姿勢に転換 する必要がありそうである。そのために は、先輩留学生やOBとの交流の機会(行 事など)をさらに増やすなどありそうだ。
(2)図書の充実		

3.社会・地域への知の還元

(1)資料保存・修復の取組み	S	貴重資料保存・展示への真摯な態度は見習うべきものがある。震災対策には一日の長があるところで、全国的に共有したいものである。漱石文庫のような目立つものにクラウドファンディングを適用したのは良かった。今後は規模を拡大するための工夫が必要だろう。企画展について、漱石、ダーウィンなどはもちろん、テーマが地味であっても、学術的価値の高いものを開催してほしい(来館者数だけが価値の尺度ではない)。広報は国立大学の中でも特に優れている。東北大学の場合、高大連携は、予備校的な速習ではなく、学問とどう向き合うかという大きな構想で行うべきと考える。高校生を引きつける「学問の香り」をどのように提供するかを図書館としてじっくり考えていただきたい。他館とのコラボレーションについては、「東日本大震災アーカイブワークショップ」、企画展『10万冊が語りかける東日本大震災』など、顕著な活動をしている。全体に、震災関係についてのアクティビティの継続は大きな課題であり続けるだろう。
(2)クラウドファンディングの実施	A	
(3)展示会・講演会の実施	A	
(4)広報の強化	S	
(5)高大連携への貢献		
(6)他の館種とのコラボレーション	S	
(7)震災ライブラリーの継続	S	

4.組織・運営

(1)財政基盤の強化	S	全学・部局の費用負担のバランス、基金やクラウドファンディング、オープンサイエンスへの貢献など、優れた試みが見られ、成果も示されている。組織の合理化や業務システムの改善は(特に日本では)むずかしい問題だが、若手に優れた人材が多く、希望が持てる。調査研究に人を投入し、尽力しているのも心強い。防災、特に
(2)事務体制の見直し・最適化	B	
(3)業務システムの改善	A	
(4)調査研究機能の向上	A	
(5)人材育成の充実	A	
(6)防災対策の強化	S	

震災対策には限りがないとは思いますが、よくやっている印象を受けた。防災は、予防だけでなくレジリエンスが大切であり、復旧の経験を後代に伝える努力をやり続けてほしい。

5.その他(総評やお気づきの点など)

図書館のありかたや役割は、ここ10年ほどで大きく変化した。デジタル化とオープンサイエンスの舞台となり、また、考古学や古典文学のような伝統的な学問からAIのような革新的(ある意味で破壊的)な分野まで、大きなスペクトルに対応しなければならなくなっている。一方で、国から来る予算は潤沢とは言えず、煩瑣な日常業務をかかえる図書館はそのときの流行だけで動けるわけでもない。大学全体で学問の価値とは何かを問い直すとともに、図書館の果たす役割と実務のありかたの再検討を進めていただきたい。キュレーションについても、生成系AIでできることもあればできないこともある。問い合わせに対してAIを使うのは良いが、これを参考にしながら職員の良識と判断で回答することが必要だろう。その意味で、人間力のある職員の育成が最も重要な課題になる(従って図書館の価値は高くなる一方と思われる)。

学問の効果は、経済的なものだけではない。これからは、国際的な信頼や尊敬を勝ち取ることがますます重要となり、そのための人材育成が東北大学のような教育研究機関の中心的なミッションとなるだろう。生成AI時代に本当に必要な知とは何か、図書館の立場でも考え続けていただきたい。

今、東北大学は、日本を代表するオープンサイエンスの舞台となりつつある。これは、大野総長・大隅館長の尽力によるものが大きい。来年度から新体制になると聞くと、引き続き継承発展のための仕組みをしっかりと整えて図書館の運営を進めていただきたい。

2.2.2 酒見 佳世 委員

自己点検・評価報告書の事項	評価	コメント
1. 学術情報整備の促進		
1.1 学習用学術情報資源(学生用図書等)の整備		
(1)学生用図書の財源確保	B	電子ブックについては各館でその認知度を高める工夫がなされていたが、むしろ提供タイトル数を一気に増やすことの方が認知度をあげるには近道ではないだろうか。予算面の制約があることや、学生や教員による選書を進める意味からも、電子ブックの試読型サービスを通年で継続する形で導入されてみてはどうかと思う。
(2)学生用図書の選書		
(3)学生選書の取組み		
(4)電子ブックの充実	A	
1.2 基盤的学術情報(電子ジャーナル等)と研究環境の整備		
(1)電子ジャーナルの財源確保	S	転換契約とその財源確保について、東北大学のファーストペンギンとしての取組みは素晴らしい。今後、海に飛び込んだペンギンがどのように泳ぎ、餌をとり、そしてまた陸に戻るのか、出口への道筋までを一緒に飛び込んだ他大学とも協力しながら、共有していただきたいと思う。
(2)電子ジャーナルの選定	A	
(3)蔵書目録データベースの整備	A	
(4)教育・研究成果等の発信		
(5)貴重資料の電子化	S	
2. 学習環境の整備		
2.1 図書館施設・設備		
(1)施設・設備の整備	S	農学分館、医学分館、北青葉山分館など、それぞれに移転・改修がすすめられており、コロナ禍による利用の変化に合わせて様々なタイプの席が提供され、利用者にとってより使いやすい環境が提供されていた。惜しむらくは、そこで展開されるべき利用者支援のサービスがあまり取り上げられず印象に残らない点である。
(2)書庫の狭隘化への対応	S	
(3)ラーニングコモنزの整備と活用	A	

2.2 図書館サービス機能

(1)開館時間延長のための経費確保	B	開館時間の長さや土日開館の実施など、十分に利用者に配慮したものになっていると思う。その一方で(予算の出所などから考えれば仕方のないこととはいえ)、利用者の属性によって利用が制限されてしまうことには一考の余地があると考えている。今後、実際の利用状況を確認しながら徐々に条件が緩和されていくことを望みたい。
(2)開館時間とサービス	B	
(3)学生の利用状況		
(4)情報利用環境の整備		
(5)初年次学生向け科目への参画	A	初年次学生向け科目への参画は、アカデミックスキルのための優れた実践事例であったと思う。最終的に図書館が関わらなかったとはいえ、図書館の取組みから「学問論」の授業が必修化されたことは評価に値する。
(6)情報リテラシー教育		

2.3 国際化対応

(1)留学生向けサービス		
(2)図書の充実		

3.社会・地域への知の還元

(1)資料保存・修復の取組み	S	クラウドファンディングを活用して、貴重資料の電子化を進めた事例は、他の図書館にも非常に参考になる取組みであると思う。
(2)クラウドファンディングの実施	S	
(3)展示会・講演会の実施		
(4)広報の強化	S	
(5)高大連携への貢献		今回の評価を通じて、広報と連携の意識を強く持ちながら業務を進めていくことが、図書館にとって今後更に重要になるのだろうということを強く感じた。図書館が図書館として単体でできることに集中するほど、結果として外からは何をやっているかが見えづらく、評価もされにくくなるように思う。
(6)他の館種とのコラボレーション		
(7)震災ライブラリーの継続		

4.組織・運営		
(1)財政基盤の強化	S	若手職員の方々との質疑を通じて、彼らの意欲や意識の高さに感銘を受けた。今後のサービス向上に向けては、そうした若手職員の考えなども積極的に取り入れて進められるとよいのではないかと思います。
(2)事務体制の見直し・最適化		
(3)業務システムの改善		
(4)調査研究機能の向上		
(5)人材育成の充実	A	
(6)防災対策の強化	A	

5.その他(総評やお気づきの点など)

今回の評価期間である2017-2022年は、予算・人員ともに減少傾向にあり、コロナ禍や地震など予測不可能な事態に対応する必要もあった中で、図書館として単体で出来ることはほぼ実施されていると思う。それ故に、利用者支援のサービスが不足気味に感じられたように思う。若手職員の方の発言にもあった通り、図書館に人がいる意味を改めて考える必要がある。

転換契約の事例でも、もはや1館でどうなるという話ではなく、他館と一緒にグループで動くことが必要になっているように、東北大学附属図書館におけるサービスの更なる進化のためには、外との連携・協力がポイントになるのではないかな。

学生の力を借りることを含め、学部、他部署、他大学、地域、社会などとも連携することで、予算・人員の不足を補いながら、今後の新しい役割(やりたいこと、やるべきこと)を達成していくことが大事なのではないかと思う。

2.2.3 佐藤 翔 委員

自己点検・評価報告書の事項	評価	コメント
1. 学術情報整備の促進		
1.1 学習用学術情報資源(学生用図書等)の整備		
(1)学生用図書の財源確保	B	電子ブックについては導入しているのみならず、各図書館で導入した個別タイトルの紹介と利用のためのコードを館内の目立つ位置に掲示するなど実際の利用につながるであろう普及策がとられており、参考になった。実際の利用も医学分館等では多いとのことであり、高く評価できる。学生用図書の選書・学生選書についてはやや評価が悩ましく、教員による選書、図書館員による選書、学生選書それぞれの利用状況等の分析も実施することによってそれぞれの効果まで検証することで今後の施策の見直し等にもつながるのではないかな。
(2)学生用図書の選書	A	
(3)学生選書の取組み	A	
(4)電子ブックの充実	A	
1.2 基盤的学術情報(電子ジャーナル等)と研究環境の整備		
(1)電子ジャーナルの財源確保	S	電子ジャーナルについて、転換契約を1stペンギンとして推進していることは非常に高く評価できる(財源確保および成果発信の両面について)。また、目録データベースの整備と貴重資料電子化についてはともに充実した取り組み状況にあり、これも高く自己評価されていることにもうなずける。ただし東北大附属図書館については非常に多くの貴重コレクションを有し、その一部が必ずしも有効に活用できる状態に至っていないことも視察において紹介いただいた。現状に満足されることなく、一層の整理・電子化・アクセス環境整備に取り
(2)電子ジャーナルの選定	A	
(3)蔵書目録データベースの整備	A	
(4)教育・研究成果等の発信	S	
(5)貴重資料の電子化	S	

組んでいただきたい。

2. 学習環境の整備

2.1 図書館施設・設備

(1)施設・設備の整備	S	図書館施設・設備については分館も含めまさに更新がされているタイミングにあたり、よく検討・整備された環境であることが確認できた。書庫狭隘化に対する農学分館地下書庫の整備ははじめの取り組みも高く評価できると考える。
(2)書庫の狭隘化への対応	S	
(3)ラーニングコモンズの整備と活用	S	

2.2 図書館サービス機能

(1)開館時間延長のための経費確保	B	視察当日も指摘した点であるが、施設・設備の整備が進んでいる状況に比して、特に学生向けのサービス・支援に関しては自己点検・評価においても全般に「標準的」とされていたが、それが妥当とうなずける面もある、という印象であった。もちろん視察等は短時間にとどまるものの、例えば利用者向けの配布物等を確認しても、あるいは自己点検・評価報告書全体を見渡しても、学生に対する人的支援（レファレンス等）に関する記述がごくわずかであることに気づかされる。マンパワーの不足等の問題はあり、またそもそも利用者の多くがある程度、自身で自身にあった利用ができるであろう高いリテラシーを有する学生であるということも一因であろうが、端的に言って「優れた環境を提供しているので、一人で（複数人でもいいが、とにかく利用者が自分たちで勝手に）使ってください」という印象を受ける図書館である点はいささか気にかかる。特にラーニング・コモンズに人的支援があまり見られないことは、近年の大学図書館としてはいささか奇異な印象である。マ
(2)開館時間とサービス	B	
(3)学生の利用状況	B	
(4)情報利用環境の整備	A	
(5)初年次学生向け科目への参画	A	
(6)情報リテラシー教育	A	

		ンパワーの不足については学生を雇用してのピア・サポート等の取り組みの可能性もあるところであり、検討を期待したい。 初年次学生向け科目への参画について、自己点検・評価ではS評価となっていたが、これは講評で他の委員から指摘があったとおり、全学的な科目への参画について資料として紹介はされたといっても、企画段階で声をかけられなかった点を考えるとさすがにS評価とすることは難しいのではないかと考える。
--	--	--

2.3 国際化対応

(1)留学生向けサービス	B	
(2)図書の充実	B	

3.社会・地域への知の還元

(1)資料保存・修復の取組み	S	社会・地域への知の還元について、多様な取り組みが実施されている点は高く評価されるべきと考える。また広報について、SNS等も積極的に活用していることは国立大学図書館の中でも東北大学がトップ級であろう。ただしSNSについては移り変わりも早く、特に学生については主に利用するツールがすぐ変わるため、動向に注意しつつ取捨選択が必要と考える。
(2)クラウドファンディングの実施	S	
(3)展示会・講演会の実施	A	
(4)広報の強化	S	
(5)高大連携への貢献	B	
(6)他の館種とのコラボレーション	A	
(7)震災ライブラリーの継続	A	

4.組織・運営

(1)財政基盤の強化	S	若手職員との意見交換の中で、新規の取り組みがしたいと考えても定期的な異動がためらわせる、といった趣旨の意見があった。全体的には比較的人員マンパワーが不足している中での効率的・効果的な配置というのは難しい問題であるのはもちろんとして、職員のやる気をどう業務につ
(2)事務体制の見直し・最適化	B	
(3)業務システムの改善	A	
(4)調査研究機能の向上	A	
(5)人材育成の充実	B	
(6)防災対策の強化	A	

なげるかという点は引き続き意識されたい。

5.その他(総評やお気づきの点など)

全体に、東北大学附属図書館は施設や制度設計の面では先進的な取り組みを積極的に取り入れたり、地に足のついた必要な取り組みを実施するなど(例えばこの外部委員からの評価についてもそうであり、自己点検・評価報告書でLibQual+に基づくであろう利用者評価を継続している点もそうである)、システマティックな取り組みについては十分以上に実施できている状況にあるというのが第一印象である。そのため自己点検・評価報告書を見る限りでは、図書館自身が感じている欠点以外に特に指摘すべきところがないようにも感じていた。

実際に視察に訪れても施設・システム面での評価について変わるところはない。

一方で、上述のようにソフト面(サービス面)について、施設や制度設計のレベルの高さに比すと手薄に見えるという印象を視察で受けた。その大部分はマンパワーの不足によるところと考えられるが、視察時の総評等でもご意見あったように、学内他部署との連携、あるいは学生の活用など、職員の不足を補いながら人的支援で館内を満たす方策はありえるものである。そうした方法の企画・設計もまた次の段階として検討の余地があるのではないだろうか。

2.2.4 鈴木 秀樹 委員

自己点検・評価報告書の事項	評価	コメント
1. 学術情報整備の促進		
1.1 学習用学術情報資源(学生用図書等)の整備		
(1)学生用図書の財源確保	B	・選書ツールのオンライン化、電子ブックの本・分館共同整備や試読・トライアルの結果に基づく購入等、状況に応じた選書の取り組みを評価します。 ・学生用図書の財源が「全学的基盤経費」として確保されていることは重要ですが、減少傾向への歯止めとなる対策が必要ではないでしょうか。利用状況を分析し、蔵書構成として冊子／電子ブックの整備をどのように行うか等の方針を定め、それを基に予算要求につなげることも考えられます。 ・電子ブックの利用促進(新着案内、二次元コードの掲示等)の取り組みを評価します。
(2)学生用図書の選書	A	
(3)学生選書の取組み	B	
(4)電子ブックの充実	A	
1.2 基盤的学術情報(電子ジャーナル等)と研究環境の整備		
(1)電子ジャーナルの財源確保	S	・「東北大学学術情報整備計画」を随時改訂して方針を定め、研究環境基盤を維持しつつ、大学間連携でオープンアクセスを推進していることを高く評価します。 ・転換契約は、転換完了までの過渡的な契約形態と思いますので、引き続き国や他大学等と連携して取り組むことが肝心と思います。 ・蔵書目録データベースの整備及び貴重資料の電子化に着実に取り組んでいます。IIIF対応等の課題もありますが、中長期的な計画を立てながら進められることを期待します。
(2)電子ジャーナルの選定	A	
(3)蔵書目録データベースの整備	B	
(4)教育・研究成果等の発信	B	
(5)貴重資料の電子化	A	

		・「教育研究成果等の発信」に関し、機関リポジトリの登録件数とアクセス件数の伸びが挙げられていますが、機関リポジトリは量的な評価から質的な評価へ移っても良い時期ではないかと思えます。
--	--	--

2. 学習環境の整備

2.1 図書館施設・設備

(1)施設・設備の整備	S	・北青葉山分館、農学分館、医学分館
(2)書庫の狭隘化への対応	A	は改修工事等により、快適な施設として整備されています。
(3)ラーニングコモنزの整備と活用	A	・共用書庫の設置により、当面は狭隘化に困ることは無いと思いますが、今後、研究室からの資料返却や製本雑誌の増加が見込まれていますので、重複資料の整理計画等は早めに準備されることを推奨します。 ・ラーニングコモنزは十分に整備されています。コロナ禍を経て、もしくはウィズコロナの状況で、利用行動の変化が考えられます。さらにはGIGAスクール構想で学んだ学生の情報探索行動がどのようになるか等、利用実態を踏まえた設備・什器類の整備・配置の見直しが将来必要になると予見します。そのために、利用統計やアンケート等による利用行動や要望の調査・把握は重要になります。

2.2 図書館サービス機能

(1)開館時間延長のための経費確保	B	・2020年からのコロナ禍では、代替サービスの提供、状況に応じた開館時間やサービス内容の変更等を実施し、サービスの継続に務められたことを評価します。
(2)開館時間とサービス	B	
(3)学生の利用状況	B	
(4)情報利用環境の整備	B	

(5)初年次学生向け科目への参画	A	・利用者にとって、特に「空調」と「ネットワーク環境」は快適な利用環境として必須ですので、ICT環境の整備は優先事項と位置づけることをお奨めします。
(6)情報リテラシー教育	A	・「初年次学生向け科目への参画」は、2004年度以降継続して開講していること、2020年度には全学教育貢献賞を受賞したことを評価します。一方で履修人数の減少傾向が気になります。学生のニーズに合致しているか、開講時期の検証、学生の関心喚起等の検討が必要でしょう。 ・「情報リテラシー教育」については、講習動画の作成、オンデマンドでの提供を評価します。電子的資料とオンラインサービスの拡大で、学術資料や情報を適切に取り扱うためにも、情報リテラシー教育は一層重要になると考えます。

2.3 国際化対応

(1)留学生向けサービス	A	・「留学生コンシェルジュサービス」を継続して実施しており、現時点での活動は及第点に達しています。
(2)図書の充実	B	・国際卓越研究大学として「外国人研究者」「留学生」「国際対応力のあるスタッフ」を大きく増やすKPIを掲げており、附属図書館も現在の施策の継続・充実に留まらない活動やサービスが求められるのではないのでしょうか。その意味では、国際化対応は今後の重要な課題と考えられます。「国際対応力のあるスタッフ」はどう定義づけられているか不明ですが、図書館職員を含むとすると、人材育成の観点から留意する必要があると思います。

3.社会・地域への知の還元

(1)資料保存・修復の取組み	S	・資料保存に関し、体制整備、研修派遣、資金獲得等、多面的に取り組んでいることを評価します。貴重な資料も多いので長期にわたると思いますが、継続して活動することが重要です。
(2)クラウドファンディングの実施	A	
(3)展示会・講演会の実施	A	
(4)広報の強化	A	
(5)高大連携への貢献	C	
(6)他の館種とのコラボレーション	B	・高大連携は受け身の活動にとどまっています。大学の方針としてどこまで注力するかにも依りますが、未来のステークホルダーになる可能性もあり、教育組織との連携により学術の世界へ誘うような取り組み等も考えられるかもしれません。
(7)震災ライブラリーの継続	A	

4.組織・運営

(1)財政基盤の強化	A	・外部資金・クラウドファンディング・学内経費等、多様な方法で財源確保に努めていることを評価します。活動の成果や実績を上手く学内外にアピールし、図書館の価値を広めることが、予算獲得を含む図書館活動への共感につながると思います。 ・事務組織体制は検討の余地があるように見受けられます。オープンサイエンス、デジタルライブラリー、DX等、新たな役割、機能、サービスを見据えつつ、再編検討を課題として提起します。 ・防災対策は、過去の経験を踏まえて十分に施されています。地震発生時の映像を拝見しましたが、自然の脅威に抗うすべには限りがあることを実感しました。
(2)事務体制の見直し・最適化	B	
(3)業務システムの改善	B	
(4)調査研究機能の向上	A	
(5)人材育成の充実	A	
(6)防災対策の強化	A	

5.その他(総評やお気づきの点など)

- ・全体として、施設・設備、資料は高い水準で整備されており、利用者サービスや地域貢献に係る活動も十分に行われています。
- ・あえて言えば、研究支援に関する事項が少なく、図書館としての方向性が見えませんでした。研究データ管理を含むオープンサイエンスへの対応には附属図書館の関与を求められるでしょうし、国

際卓越研究大学として研究力向上に取り組むのであれば、研究環境の整備だけでなく、さらに踏み込んだ取り組みが図書館に期待されるかもしれません。

- ・職員の意識やモチベーションは高く感じました。「利用者アンケート」からも利用者への職員の対応は評価されていますので、継承していただきたいと思います。
- ・経験の浅い職員には担当業務を習得しつつ、学術情報の動向等、幅広い興味・関心をもって知識を拡げ自身の糧にし、また、人的ネットワークを広げてもらいたいと思います。
- ・資料や説明は、附属図書館に関するものが主でしたが、大学の目標・計画についての資料があると良いと思いました。附属図書館も大学の一機能であり、大学の方針が図書館のあり方や活動に影響するものと考えます。
- ・事項毎、評点を付しましたが、人的資源や予算には限りがあり、全ての課題に同時に取り組むことはできませんので、大学の方針・事業計画、利用者ニーズ等を踏まえ優先順位を付けるなどして、戦略的に進めていただければと思います。

2.2.5 松本 美奈 委員

自己点検・評価報告書の事項	評価	コメント
1. 学術情報整備の促進		
1.1 学習用学術情報資源(学生用図書等)の整備		
(1)学生用図書の財源確保	B	
(2)学生用図書の選書	B	
(3)学生選書の取組み	B	
(4)電子ブックの充実	A	
1.2 基盤的学術情報(電子ジャーナル等)と研究環境の整備		
(1)電子ジャーナルの財源確保	S	
(2)電子ジャーナルの選定	A	
(3)蔵書目録データベースの整備	A	
(4)教育・研究成果等の発信	S	
(5)貴重資料の電子化	S	
2.学習環境の整備		
2.1 図書館施設・設備		
(1)施設・設備の整備	B	工学分館の女子学生への配慮が印象に残りました。トイレに生理用品を配備したら利用者数が増えたとのこと。ふだんから女子学生への目配りを心がけているのでしょうか。本館や他の分館でも女子学生や留学生ら「少数派」への配慮がなされているのでしょうか。
(2)書庫の狭隘化への対応	S	
(3)ラーニングコモنزの整備と活用	A	
2.2 図書館サービス機能		
(1)開館時間延長のための経費確保	B	「初年次学生向け科目への参画」(P27)の記述は違和感を払拭できません。すでに「学問論」に取って代わられていること、しかもそれを「学問論の制定プロセスに図書館は関わることができなかった」とやや恨めしげな表現で記載しています。 図書館のこれまでの取り組みは、残念ながら、学内的には評価されていなかった
(2)開館時間とサービス	B	
(3)学生の利用状況	B	
(4)情報利用環境の整備	A	
(5)初年次学生向け科目への参画	A	
(6)情報リテラシー教育	A	

		たと受け止めることもできます。 情報リテラシー教育についても、具体的な記載が乏しいため、「A」とはしましたが、実際は評価不能です。
--	--	--

2.3 国際化対応

(1)留学生向けサービス	B	
(2)図書の充実	B	

3.社会・地域への知の還元

(1)資料保存・修復の取組み	S	
(2)クラウドファンディングの実施	S	
(3)展示会・講演会の実施	A	
(4)広報の強化	A	
(5)高大連携への貢献	B	
(6)他の館種とのコラボレーション	A	
(7)震災ライブラリーの継続	S	

4.組織・運営

(1)財政基盤の強化	A	
(2)事務体制の見直し・最適化	C	
(3)業務システムの改善	B	
(4)調査研究機能の向上	A	
(5)人材育成の充実	A	
(6)防災対策の強化	A	

5.その他(総評やお気づきの点など)

・ジェンダーの視点の欠如

アンケートで男女別集計を行っていないことに驚きました。国立大学だけでなく、国としても「ジェンダー不公正」を解消していくことが求められている中での雑な扱いに、違和感を抱きます。女子学生・研究者を支援し、増やしていくにはどうしたらいいかを考える上で、図書館の存在感と役割は非常に大きいはずです。

回答状況と在籍者数を比較すると、女子学生の多い学部・研究科の回答率が高い傾向にあるようです。女子の方が図書館を利用し、回答している可能性が高いのではないのでしょうか。推測の域を出ませんが、それを「期待度」と読み替えると、東北大学が実現を目指す(目指していない?)「ジェンダー公正」のヒントになるかもしれません。

今後は、利用者アンケートを機械的に行うのではなく、東北大学、日本の国立大学が抱えている問

題解決という観点で調査を設計されてはいかがでしょうか。

・学生の「優秀性」に依拠した図書館経営？

全体的に「学生フレンドリー」とは言い難い印象を受けました。活字離れ、図書離れ、電子デバイス頼りという若年層の現状に背を向け、旧態依然とした「国立大学的業務運営」に終始しているようにも見えました。

今回の評価委員を招聘する際の情報提供の仕方と似ているように感じます。



▲本館2号館



▲医学分館



▲工学分館



▲農学分館

東 北 大 学 附 属 図 書 館
－ 外 部 評 価 委 員 会 報 告 書 －

2024(令和6)年3月 発行

編集・発行 東北大学附属図書館
〒 980-8576 仙台市青葉区川内27-1
Tel. 022-795-5911
FAX. 022-795-5909
